

## 「ゲラサ人の地」

マルコの福音書 5:1～13

### はじめに

聖書とは、未来に起こる、神がなそうとしておられる出来事、そしてそれは必ずそのとおりになる、完成するということが記された、いわば神の計画書です。たとえ歴史書のように、過去に起こった史実、出来事として記されていたとしても、それはすべて、未来に起こる、神がなそうとしておられることの「型」、たとえ、象徴であるということです。ですから私たちはこの聖書に記された様々な出来事を見る時、そこに神は未来において何をなそうとしておられるのか、どのような出来事、ご計画を表しておられるのかという視点を持って読まなければなりません。もしそのように聖書を捉えないならば、聖書は他の神々の宗教の本と変わらない、もしくはただの道徳書、または今の限られた人生をいかに成功的に生きるかという、ありふれた教えの本に成り下がってしまうのです。聖書は決してそのようなものではありません。神はこれまででも、そしてこれからも、聖書に記された通りに働き、その記述に従ってご計画を進めておられます。つまり聖書とは、ある意味でこの全知全能の、唯一真の神でさえも従わせるほどの力と権威を持った、絶対最強の存在だということです。たとえ神であっても、これを無視したり、否定したり、あるいは変更したりすることはできないのです。なぜなら聖書とは、神ご自身の権威を持って書かれたもの（テモテⅡ 3:16）、神の指で書かれた御言葉を土台として存在するもの（出エジプト 31:18、申命記 9:10）だからです。ですからこの聖書に記された、表された出来事は、神の権威をもって、すべて必ず、まったくそのとおりになるのです。

さて今日取り扱う聖書箇所は、イエシュアと弟子たちの一行が湖を渡り、ゲラサ人の地に行き、そこで出会った汚れた霊につかれた人の中から、その汚れた霊、すなわち悪霊どもを追い出されるという出来事です。聖書は神のご計画書である、この視点を持って読み解くならば、この出来事の中にどんな神のご計画が「型」として表されているのでしょうか。ご一緒に見てまいりたいと思います。

### 1. ゲラサ人

【新改訳 2017】マルコの福音書

5:1 こうして一行は、湖の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた。

まずこの出来事が「ゲラサ人の地」（右図では「ゲルゲサ」と表記）においてであることの意味について考えます。当時、この地は異邦人の地であったとされており、聖書では汚れた（穢れた）動物とされている「豚（レビ記 11:7）」が大量に飼育されていたことが後述されていることから、その事実が伺い知れます。ヘブル語でゲラサ人のことをゲラーシイム(גְּרָשִׁיִּים)と言い、これは「追い出す、投げ出す」という意味の動詞ガーラシュ(גָּרַשׁ)がその語源であると考えられます。このガーラシュの最初の言及を見てみますと、



【新改訳 2017】創世記

3:24 こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。

とあり、これは「エデンの園」において罪を犯した「人」アダムとエバが、園から追い出された時の場面です。この「追放し」と訳されているのが聖書で最初のガーラシュです。ですからこの「ゲラサ人」という名前には、神によってガーラシュ「追い出される」者、しかもそれは本来、「エデンの園」から追い出されることが指し示されていると考えられます。「エデンの園」とは、神のご計画の完成である「神の国」を表す最も代表的な「型」です。神は再びこのような世界、御国を建て上げるため、その国民となるべき者たちを救い、迎え入れるためにすべてのご計画を進めておられるのです。しかしこの再び建てられるエデンの園「神の国」には、今日のような、悪魔と呼ばれるサタン、および悪霊どもが働く機会も、その存在自体も認められません。すべてそこからガーラシュ「追い出される」のです。ですから、結論から述べますが、今日のこの箇所に記されている、イエシュアが汚れた霊を追い出されるという出来事の中に、それが未来に必ず起こる出来事の「型」として表されているということなのです。このように、イエシュアは、やがて終わりの日に、ご自身によって建てられる「神の国」のために、この地上から悪を一掃されるという神のご計画を表すために、あえてこの「ゲラサ人の地」を訪れられたのだと考えられます。

ちなみにこの「ゲラサ人の地」は、「湖の向こう岸」であることも記されていますが、ここにエーヴェル(עֵוֶל)「向こう側、対岸」という意味の名詞が使われています。この語源である動詞のアーヴァル(אָוַר)には「除く、追い払う」という意味があり、ゲラサの語源であるガーラシュの意味と見事に一致します。つまりイエシュアが「湖の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた」という記述、出来事には、**神が「神の国」となるこの地上から悪を一掃される**という神のご計画が、言葉と表現を変えながら、繰り返し、強調されて表されていると考えられます。

## 2. 汚れた霊につかれた人

【新改訳 2017】マルコの福音書

5:2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊につかれた人が、墓場から出て来てイエスを迎えた。  
 5:3 この人は墓場に住みついていて、もはやだれも、鎖を使ってでも、彼を縛っておくことができなかった。  
 5:4 彼はたびたび足かせと鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせも砕いてしまい、だれにも彼を押さえることはできなかった。  
 5:5 それで、夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていたのである。

ここで早速「汚れた霊」が登場します。もちろんこれは悪魔、悪霊のことなのですが、そもそもこの「汚れた」とはどういう状態を指すのでしょうか。ここに使われている「汚れる(穢れる)」という意味のヘブリス語の動詞ターメー(טָמַא)から考えてみますと、これは本来、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫であるイスラエルの民と、異邦人との間に起こったある出来事を指し示したものであると考えられます。

【新改訳 2017】創世記

- 34:1 レアがヤコブに産んだ娘ディナは、その土地の娘たちを訪ねようと出かけて行った。
- 34:2 すると、その土地の族長であるヒビ人ハモルの子シェケムが彼女を見て、これを捕らえ、これと寝て辱めた。
- 34:3 彼はヤコブの娘ディナに心を奪われ、この若い娘を愛し、彼女に優しく語りかけた。
- 34:4 シェケムは父のハモルに言った。「この娘を私の妻にしてください。」
- 34:5 ヤコブは、シェケムが自分の娘ディナを汚したことを聞いた。息子たちは、そのとき、家畜を連れて野にいた。それでヤコブは、彼らが帰って来るまで黙っていた。
- 34:6 シェケムの父ハモルは、ヤコブと話し合うためにやって来た。
- 34:7 ヤコブの息子たちは野から帰って来て、このことを聞いた。息子たちは心を痛み、激しく怒った。シェケムがヤコブの娘と寝て、イスラエルの中で恥辱となることを行ったからである。このようなことは、してはならないことである。

ヒビ人シェケムが、ヤコブすなわちイスラエルの娘ディナを「汚した」出来事、これが聖書で最初に使われたターメーが指し示しているものです。ですからターメーとは本来、「イスラエルの中で恥辱となることを行」うこと、つまりイスラエルを痛みつけ、イスラエルを怒らせることを指し示したものであると考えられます。そしてそれは、このヒビ人シェケムがディナに対して実際に行った行為に表されているように、混血、雑婚によってイスラエルの民としての血統、民族性を失わせ、ついにはイスラエルの民として生きる者たちを、この地上から消し去ってしまうことを指し示していると考えられます。

A.D70年の第一次ユダヤ戦争で、ローマ帝国によってエルサレムは陥落し、それを最後にイスラエルの民、ユダヤ人たちは国を失い、エルサレムは廃墟と化したのです。しかしユダヤ人たちは世界中に離散させられ、各地で数多くの迫害、困難に遭いながらも、死に絶えることはありませんでした。多くの国々が彼らを鎖につなぎ、奴隷のように扱い、虐殺し、根絶やしにしようとしてきました。しかし A.D1948年イスラエルは再建国し、今日も存在しています。これらの出来事、歴史事実がこの「汚れた霊につかれた人」が「墓場に住みついでいて、もはやだれも、鎖を使ってでも、彼を縛っておくことができなかった。」という様子には表されていると考えられるのです。

しかしイスラエルが再建国して70年が過ぎた今日においても、エルサレムに主の神殿は建てられておらず、異教の寺院が立ち並び、多くの異邦人がそこに住みついでいます。ユダヤ人たちはその現状を嘆き、神殿の再建を祈り求めて今日も、シオンの「山」とも呼ばれるエルサレムの、神殿の廃墟「墓場」である嘆きの壁の前に立ち、「夜も昼も…叫び続け」ています。その様子が「5:5 …夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていたのである。」という記述には表されていると考えられます。

また「石で自分のからだを傷つけていた」ともありますが、「傷つける」という意味の動詞パーツア(בצע)には、その最初の言及である申命記 23:1 の記述から本来、「切り取られ、主の集会に入れないこと」を意味する言葉であると考えられ、イスラエルが再建国された今日でもなお、帰還することなく「切り取られ」離散したままにいるユダヤ人たちのことが表されていると考えられます。(今日およそ1,400万人のユダヤ人人口のうちの半数がイスラエル国外にいます。)

このように、「汚れた霊につかれた人」についてこの箇所記されている様子が、イスラエルの民、ユダヤ人たちの苦難の歩みと、そして今日の姿を見事に表していると言えるのです。つまりイエシュアがこの人のところに来られたというこの出来事には、やがてイエシュアが「神の国」をお建てになるために、この地上に、イスラエルの民のもとに再び帰って来られる、「地上再臨」の出来事を指し示していると言えるのです。

### 3. この人から出て行け

【新改訳 2017】 マルコの福音書

5:6 彼は遠くからイエスを見つけ、走って来て拝した。

5:7 そして大声で叫んで言った。「いと高き神の子イエスよ、私とあなたに何の関係があるのですか。神によってお願いします。私を苦しめないでください。」

5:8 イエスが、「汚れた霊よ、この人から出て行け」と言われたからである。

ここに記された「5:6 彼は遠くからイエスを見つけ、走って来て拝し」ました。この「遠くから」という箇所に使われているヘブル語の形容詞ラーホーク(רחוק)の最初の言及を見てみますと、

【新改訳 2017】 創世記

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる一つの山の上で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」

22:4 三日目に、アブラハムが目を上げると、遠くの方にその場所が見えた。

とあり、この言葉が本来、モリヤの山、すなわちエルサレムを指し示したものであると考えられます。つまりイエシュアは、エルサレムに地上再臨されるということが「彼は遠くからイエスを見つけ」という記述には表されていると考えられるのです。そしてその時のユダヤ人たちの様子は以前のように、イエシュアを「いと高き神の子」メシアと認め、礼拝することが表されていると考えられます。それは彼らの目の前で、再臨されたイエシュアが悪の勢力を一掃されるからです。それが「イエスが、「汚れた霊よ、この人から出て行け」と言われた」という記述が指し示す出来事、神のご計画であると考えられます。まさにこう記されているとおりです。

【新改訳 2017】 ゼカリヤ書

14:3 【主】が出て行かれる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。

14:4 その日、主の足はエルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。

### 4. レギオン

【新改訳 2017】 マルコの福音書

5:9 イエスが「おまえの名は何か」とお尋ねになると、彼は「私の名はレギオンです。私たちは大勢ですから」と言った。

汚れた霊は「レギオン」と名乗りました。これはヘブル語にはない言葉であり、ギリシャ語名です。しかしあえてヘブル語で表記するとリグヨン(לִיגְיוֹן)となり、興味深いことに、そこにギリシャの別名、「ヤワン(Ἰων)」の文字を見つけることができます。ヤワン、すなわちギリシャとはイスラエルに敵対する勢力の象徴的存在として挙げられています。

#### 【新改訳 2017】ゼカリヤ書

9:13 わたしは、ユダをわたしの弓として引き絞り、これにエフライムをつがえたのだ。ヤワンよ、おまえの子らに向かって。シオンよ、わたしはあなたの子らを奮い立たせ、あなたを勇士の剣のようにする。

「汚れた霊」は、ギリシャ語名である「レギオン」と名乗ることで、自分が、自分たちがイスラエルに敵対する存在、つまりイエシュアに敵対する勢力であることを主張したのです。

長い間、このマルコの福音書を含め、新約聖書はギリシャ語を原語として解釈され、また翻訳されてきました。その結果、ヘブル語を原語とする旧約聖書の中で預言されてきたイスラエルに対する神の約束、「神の国」メシア王国についての神のご計画が見えなくなり、新約聖書の大部分が、ただの教えの本のようになってしまいました。しかしこのように、旧約聖書と同じヘブル語で読み解くならば、そこには「神の国」についてのご計画が、あふれるばかりに、ひしめき合うように、「これでもか、これでもか」と言わんばかりに表されているのです。私が今ここでお分かちしている内容は、この箇所のヘブル語による解釈のほんの一部です。もし一つひとつの言葉、文字を取りあげて語るならば、あまりの情報量の多さに、私も含め、皆さんの頭は処理が追いつかずフリーズしたパソコンのようになってしまうでしょう。ヘブル語は神がご自身を表すために作られた特別な言語です。ギリシャ語やその他の言語では、どれだけ改訳を繰り返しても、ヘブル語によって示されているすべての意味を表すことはできません。自分のために、自分の利益のために聖書を利用したいと言うならば、他の言語でも良いかもしれませんが。しかし神を知りたい、神の御心を求めるならば、聖書は絶対にヘブル語で読み解かれなければならないと思われま

## 5. 二千匹の豚

### 【新改訳 2017】マルコの福音書

5:10 そして、自分たちをこの地方から追い出さないでください、と懇願した。

5:11 とところで、その山腹では、おびただしい豚の群れが飼われていた。

5:12 彼らはイエスに懇願して言った。「私たちが豚に入れるように、豚の中に送ってください。」

5:13 イエスはそれを許された。そこで、汚れた霊どもは出て行って豚に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖へなだれ込み、その湖でおぼれて死んだ。

「豚」ヘブル語でハジール(חֲזִיר)は、聖書では汚れた生き物の代表的存在の一つです。

### 【新改訳 2017】レビ記

11:3 動物のうち、すべてひづめが分かれ、完全にひづめが割れているもので、反芻するもの。それは食べてもよい。

11:4 ただし、反芻するもの、あるいは、ひづめが分かれているものの中でも、次のものは食べてはならない。らくだ。これは反芻はするが、ひづめが分かれていないので、あなたがたには汚れたものである。

11:5 岩だぬき。これも反芻はするが、ひづめが分かれていないので、あなたがたには汚れたものである。

11:6 野うさぎ。これも反芻はするが、ひづめが分かれていないので、あなたがたには汚れたものである。

11:7 豚。これはひづめが分かれています、完全に割れてはいるが、反芻しないので、あなたがたには汚れたものである。

これはイスラエルの食物規定とされているものの一部ですが、ここに「豚」ハジールについての記述があります。「豚」は、他の「らくだ」や「岩だぬき」、「野うさぎ」とは違い、外見上はきよい動物のように見えます。しかし「反芻しない」、つまり内側は汚れている動物だということです。外側はきよく見えるが内側は汚れている、このような存在についてイエシュアはこう言われています。

【新改訳 2017】 マタイの福音書

7:15 偽預言者たちに用心しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。

23:27 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものだ。外側は美しく見えても、内側は死人の骨やあらゆる汚れでいっぱいだ。

またⅡコリント 11:14 には「サタンでさえ光の御使いに変装します。」とも記されています。ですからこの「おびたしい豚の群れ」には、サタンの手先となり、イスラエルの民を惑わす「偽預言者たち」「偽善の律法学者、パリサイ人」の存在が表されていると考えられます。

また「豚」は、ギリシャの最高神ゼウスにささげられる生贄であったことから、ユダヤ人たちは異教の神々を信じる者たち全般、特に当時のローマ帝国を指して、侮蔑的に彼らを「豚」ハジールと呼んだそうです。ですからここに記された「おびたしい豚の群れ」には、異教の神々を信じる人々、すなわちイスラエルの神を神としない、イエシュアをメシアとして認めない者たちすべてをも指していると考えられます。そしてその者たちもろとも滅ぼされる、この出来事は黙示録に記された「火の池」の預言に結びつくと考えられます。

【新改訳 2017】 ヨハネの黙示録

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かで真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。

19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。

19:16 その衣と、もものところには、「**王の王、主の主**」という名が記されていた。

19:19 また私は、**獣と地の王たちとその軍勢**が集まって、馬に乗る方とその軍勢に戦いを挑むのを見た。

19:20 しかし、獣は捕らえられた。また、**獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた者たちと、獣の像を拝む者たちを惑わした偽預言者も、獣とともに捕らえられた。この両者は生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。**

20:10 彼らを惑わした**悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた**。そこには**獣も偽預言者もいる**。彼らは**昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける**。

20:14 それから、**死とよみは火の池に投げ込まれた**。これが、すなわち火の池が、第二の死である。

20:15 **いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。**

これは「**確かで真実な方**」、「**神のことば**」、「**王の王、主の主**」と呼ばれる御方、すなわち神の御子、メシアであるイエシュアが、地上に再臨される時のことが記されている箇所です。イスラエルに敵対する、イスラエルの神を神とせず、反キリストとも呼ばれる「**獣**」と「**偽預言者**」、これに従うすべての者たち、そして「**死とよみ**」「**悪魔**」ももろともに「**火の池に投げ込まれ**」、「**昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける**」ことが預言されている箇所です。このように、彼らは「神の国」に入れず、地上から追い出されるばかりか、このような、あまりにも悲惨な結末を迎えることになるのです。この事実が「**5:13 イエスはそれを許された。そこで、汚れた霊どもは出て行って豚に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖へなだれ込み、その湖でおぼれて死んだ。**」という記述には表されているのだと考えられます。このように、「神の国」が建てられることも、そしてすべての悪が一扫されることも、すべてイエシュアただお一人によってなされることが神のご計画であると言えます。

ちなみに、この豚の群れは「**二千匹ほど**」であったと記されていますが、以下の箇所などから、この「二千」という数には、「町の外側に置かれること」、そして「神から離されること」というような意味合いがあると考えられます。

【新改訳 2017】民数記

35:5 あなたがたは、**町の外側**に、町を真ん中として東側に**二千**キュビト、南側に**二千**キュビト、西側に**二千**キュビト、北側に**二千**キュビトを測れ。これが彼らの町々の放牧地となる。

【新改訳 2017】ヨシヤ記

3:3 民に命じた。「あなたがたの神、【主】の契約の箱を見、さらにレビ人の祭司たちがそれを担いでいるのを見たら、自分のいる場所を出発して、その後を進みなさい。

3:4 あなたがたが行くべき道を知るためである。あなたがたは今まで、この道を通ったことがないからだ。ただし、あなたがたと箱の間に**二千**キュビトほどの距離をおけ。**箱に近づいてはならない。**」

このような記述から、「二千匹ほどの豚の群れ」には、神に敵対するものはすべて「**町の外側**」すなわち「神の国」の外に出されること、そして、「神の国」には決して「**近づいてはならない**」こと、近づくことさえも許されないようになる、ということが表されているのではないかと考えられます。

## まとめ

神がイエシュアによってこの地上に打ち建てようとしておられる「神の国」には、もはやサタンも悪霊も、それに従う者たちも存在しません。神が定めておられる「その日」が来たならば、イエシュアは速やかにこれら神に敵対するすべての勢力を地上から一掃するために再臨されます。そして世界中に散らされたすべてのイスラエルの民を集め、彼らによってすべての国々を祝福する世界、すなわちメシア王国、千年王国とも呼ばれる「神の国」を建てられるのです。アブラハム、イサク、そしてイスラエルと交わされた契約のゆえに、そしてそれが聖書に記されたゆえに、神はイスラエルを用い、これを建て直して「神の国」のご計画を完成させようとしておられます。ちなみに今日取りあげた「ゲラサ人の地」はマタイの福音書の並行記事（マタイ 8:28）では「ガダラ人の地」となっていて、この名の語源として考えられるヘブル語の動詞ガーダル(גָדַל)には本来、「神殿を修復、修理する（Ⅱ列王記 12:12）」という意味があります。

ですから敵である悪魔、悪霊どものかしらであるサタンは、このイスラエルの民、ユダヤ人をなんとか根絶やしにしようとしています。「偽りの父」とも呼ばれる悪魔、サタンは、その偽りの言葉を使い、多くの「偽預言者たち」、そして反キリストともよばれる「獣」これらの存在を従わせて、神のご計画の完成を阻もうとしています。しかしサタンのこれらの働きも、すべて聖書に記されたとおりに行われているのです。神が聖書に従われることを冒頭で述べましたが、このように、敵であるサタンもまた実際にそうなのです。聖書がいかに力と権威をもった存在であるかがおわかりいただけるでしょうか。

聖書に記された、表されていることは、必ずそのとおりに実現します。ですから今日の箇所にも表されていたような、聖書に記された神のご計画に、これからはますます目をとめてまいりたいと思います。聖霊の助けがありますように。